

遣新羅使人歌とその場

——長門の浦船出歌群の場合——

近 藤 健 史

一
作歌の場は、作歌する者や作品に大きな影響を与えるという点で、看過することのできない問題である。

万葉集卷十五前半部には、天平八年夏出發の遣新羅使人等の歌と記されている、いわゆる「遣新羅使歌群」が、船の進行に従って、作歌事情により二十五の小歌群に収められている。

その作歌事情に関して、これらの歌の多くが、それぞれの地での宴などで作歌誦詠されたとする窪田空穂氏(注1)や久米常民氏(注2)の説は、作歌の場を言い当てたものとして注目される。しかし、小歌群における歌とその場の関係や各小歌群とそれらを総じての「遣新羅使歌群」の関わりについては、依然として明らかではない。

そこで、この「遣新羅使歌群」の本質を究明しようとするとき、各小歌群における作歌誦詠の場や作歌時の関連性を考えることは、重要な問題の一つと思われる。

以前、そのことから冒頭歌十一首(注3)、麻里布の浦八首・竹敷の浦十八首等の歌群について報告し、歌の座について考えてみた。そしてそれは一方作者無記名歌などの諸問題を解明する手がかりを与えるものと思われる。

本稿は、前稿につづいての一連のもので、「長門の浦船出歌群」(三六二二~三六二九)に焦点を置いたものである。

二

遣新羅使歌群は、作歌事情により二十六の小歌群に分類されており、その記載形式を題詞と左注でみれば次の

ようである。(書き下しは塙書房「万葉集訳文篇」による)

- (1) 右の十一首、贈答(三五七八〜八八)
- (2) 右の一首、秦間満(三五八九)
- (3) 右の一首、暫しく私家に還りて思ひを陳ぶ。(三五九〇)
- (4) 右の三首、発つに臨む時に作る歌(三五九一〜九三)
- (5) 右の八首、舟に乗りて海に入り路の上にして作る歌(三五九四〜〇一)
- (6) 所に当たりて誦詠する古歌(三六〇一〜一一)
- (7) 備後国水調郡の長井の浦にして船泊まりする夜に作る歌三首(三六一二〜一四)
- (8) 風速の浦にして船泊まりする夜に作る歌二首(三六一五〜一六)
- (9) 安芸国の長門の島にして磯辺に船泊まりして作る歌五首(三六一七〜二一)
- (10) 長門の浦より船出する夜に月の光を仰ぎ観て作る歌三首(三六二二〜二四)
- (11) 古き挽歌一首并せて短歌(三六二五〜二六)
- (12) 物に属きて思ひを発す歌一首并せて短歌(三六二七〜二九)
- (13) 周防国玖河郡の麻里布の浦を行く時に作る歌八首(三六三〇〜三七)
- (14) 大島の鳴門を過ぎて再宿を経ぬる後に追ひて作る歌二首(三六三八〜三九)
- (15) 熊毛の浦に船泊まりする夜に作る歌四首(三六四〇〜四三)
- (16) 佐婆の海中にして忽ちに逆風に遭ひ、漲へる浪に漂流す。経宿りて後に幸に順風を得、豊前国下毛郡の分間の浦に到着す。ここに艱難を追ひて怛み悽惻して作る歌八首(三六四四〜五一)
- (17) 筑紫の館に至りて本郷を遙かに望み悽愴きて作る歌四首(三六五二〜五五)
- (18) 七夕に天漢を仰ぎ観て各思ふ所を陳べて作る歌三首(三六五六〜五八)
- (19) 海辺に月を望みて作る歌九首(三六五九〜六七)
- (20) 筑前国志麻郡の韓亭に到りて、船泊まりし三日を経ぬ。ここに夜月の光皎々として流照す。奄にこの華に對し旅情悽愴し各心緒を陳べ聊かに裁る歌六首(三六六八〜七三)
- (21) 引津の亭に船泊まりして作る歌七首(三六七四〜八〇)
- (22) 肥前国松浦郡の狛島の亭にして船泊まりする夜に、海浪を遙かに望み各旅の心を働みて作る歌七首(三六八一〜八七)

(23) 壹岐島に至りて、雪連宅満の忽ちに鬼病に遇ひて死去せし時に作る歌一首并せて短歌
(三六八八～九六)

(24) 対馬島の浅茅の浦に到り船泊まりする時に、順風を得ずて経停すること五日なり。ここに物華を瞻望し各働心を陳べて作る歌三首(三六九七～九九)

(25) 竹敷の浦にして船泊まりする時に各心緒を陳べて作る歌十八首(三七〇〇～一七)

(26) 筑紫を回り来、海路にて京に入らむとし、播磨國の家島に到りし時に作る歌五首(三七一八～二二)

右の中で「長門の浦船出歌群」と思われるのは、(11)・(12)の歌群であるが、そのうちの題詞に具体的な作歌の場所を示していない(11)「古き挽歌」、(12)「物に属きて思ひを発す歌」の歌群には、その不鮮明さから次のような問題が提示されている。まず、(12)の歌群は、従来から巻四・五〇九番歌「丹比真人笠麻呂筑紫の国に下る時に作る歌」(以下(12')と記す)と句法の類似が指摘されており、「模倣」や「意識的に学んだ」ためとされている。

また、(11)の「古き挽歌」は、船上において、妹と離別している心情を表わすために転用されて誦われた歌であると説かれている。

さらにまた、近時、阪下圭八氏・後藤利雄氏は、(11)

「古き挽歌」と(6)「所に当りて誦詠する古歌」歌群の關係に注目され、(6)と(11)・(12)の歌群は再構成時において切り継がれたと指摘されている。その結論を簡単に述べてみると、例えば、阪下氏は、(6)と(11)の歌群を「古歌」ということで同一視され、両歌群とも虚構的な増補であり、さらに(12)の歌群は、家持が(12')の歌を粉本として机上で制作したらしいと論じておられる。また、後藤氏は、(12)の歌群はもとから資料の中にあり、(11)の歌群は、(12)の歌群により編纂の途中で思い出し追加したもので、誦詠されなかったために(6)「所に当りて誦詠する古歌」群に収められなかったと説いておられる。

このように、(11)の歌群は(6)の歌群との関連から実際に誦詠されたか否かという問題が、また、(12)の歌群には、(12')の丹比真人笠麻呂作歌との類似の問題、さらには(11)の歌群との問題があり、いずれも単純には割り切れそうもない問題である。

そして今、これらの問題を解明するにあたって、(11)・(12)の歌群の存在する意味の考察を忘れてはならないように思われる。つまり、もし、(11)と(12)の歌群が後にその位置に増補されたとしたならば、そこに両歌群が増補された意図や効果が「虚構的切り継ぎ」ゆえに強く浮び上がってくるのではなからうか。だが単に記載された結果だ

けからみると、わずかに語句の類似をみるだけであり、たいした意味もないように思われる。

そこで、両歌群の歌を「場」に即して検討した結果、その(11)・(12)の両歌群には、作歌時の連想的関連というべき関係がみられ、そしてその連想的関連は、直前に収められている(10)「長門の浦を船出する夜、月を仰ぎ観て作る歌三首」からの一連続体とでもいうべきものであり、それらの歌は同一の場で作歌・誦詠されたと推察された。以下、題詞の記載形式や歌の相互関係を検討し、それらの論証を試みたい。

三

(11)・(12)の歌群の題詞は、具体的に作歌の場所を示さない形式である。同様の形式を有する歌群は、(6)・(18)・(19)の三例である。それらの配列位置を前述した記載形式の中で示すと次に記す通りである。(他の題詞、左注は、前節で掲出のため省略)

(1) (5)まで左注によって分類)

～

(5) (6) 「所に当たりて誦詠する古歌」

(7) (7)以降題詞によって分類)

～
(11) 「古き挽歌一首并せて短歌」

(12) 「物に属きて思ひを發す歌一首并せて短歌」

～

(18) 「七夕に天漢を仰ぎ観て各思ふ所を陳べて作る歌三首」

(19) 「海辺に月を望みて作る歌九首」

～

(20)

右によると、(6)の歌群は作歌した地名を明記しない左注により分類する、いわゆる左注型(1)～(5)の次に収められ、また、(11)・(12)・(18)・(19)の歌群は、地名を明記する題詞によって分類する、いわゆる題詞型(7)以降)に収められている。

そのうちの、(6)と(11)の歌群は既述したように「古歌」ということで同一視され、増補説の根拠の一つとされているが、右で見たように配列位置に少し異なる様相を呈している両歌群であり、はたして同一視できるのか疑問であるし、また(6)の歌群に(11)の歌群の歌が収められないことを理由に、(11)の歌群の歌を誦詠されなかったとすることに關してもいささか疑問が残る。

そこで次に両歌群の題詞と歌内容(詠み込まれた地名)を記し比較検討してみると、そこには歌群の性格の相違と見い出される。

題詞・左注	地名
(1) (三五七八〜八八) 右の十一首、贈答	(七八) 武庫の浦 <small>歌番号は上記と照応するので末尾二桁で記す</small>
(2) (三五八九) 右の一首、秦間満	(八九) 生駒山
(3) (三五九〇) 右の一首、暫しく私家に還りて思ひを陳ぶ。	(九〇) 生駒山
(4) (三五九一〜九三) 右の三首、発つに臨む時に作る歌	(九三) 大伴の三津
(5) (三五九四〜〇一) 右の八首、舟に乗りて海に入り路の上にして作る歌	(九五) 武庫の浦 (九六) 印南つま (九八) 玉の浦 (九九) 神島 (〇一) むろの木
(6) 所に当たりて誦詠する古歌 (三六〇二) 右の一首、雲を詠む。	

(1) (三六〇三〜〇五) 右の三首、恋の歌 (〇六〜一〇) 柿本朝臣人麻呂の歌に曰く(全てに付く)	(〇五) 飾磨川 (〇六) 処女・野島が崎 (〇七) 藤江の浦 (〇八) 明石の浦 (〇九) 武庫の浦 (一〇) 安胡の浦
(11) 七夕の歌一首 (三六一一) 右、柿本朝臣人麻呂の歌 古き挽歌一首并せて短歌 (三六二五〜二六) 右、丹比大夫、亡き妻を懐愴く歌	

たとえば、(6)の歌群の異質性は題詞の「所に当たりて」の表現が明確に示しているように、それは、「旅の行く先々での古歌を集めた」という性格を有している。また、その題詞には作歌した場所が具体的に明記されていないがその不鮮明さは歌に詠み込まれた地名によって補われている。そしてその補足的な現象は左注型の(2)と(5)においても同様であり、詠み込まれた地名は「武庫の浦」を除いて重複することがない。さらにまた、(6)の歌

群には「柿本朝臣人麻呂の歌に曰く」が関わっており、この歌群の形成には、作歌の場所を補足する「地名」と「柿本朝臣人麻呂の歌」という二つの配列基準が認められる。

一方、(11)の歌群には、(6)の歌群と同様に題詞に作歌の場所が明記されていないが、歌内容は(6)と異ってそれを補う地名が詠み込まれておらず、また「柿本朝臣人麻呂の歌」などといった拠りどころを示す注記もなく、(6)の歌群の形成基準と合致する要素はあまり認められない。

よって、(6)と(11)の歌群を「古歌」ということで一概に同一視することはできないのではなからうか。また、(11)の歌群の歌が(6)の歌群に収められていないことで、(11)の歌群の歌が誦詠されなかったとは判定し難いように思われる。

なお、(6)の歌群の歌が、何故にその「所」に配置されず一括されたかについては、使人等が古歌巻を携行し、行く先々でそれを見て誦詠した古歌を難波出發後、(7)の長井の浦までの歌が欠けている所に、古歌巻に載せられている順序で書き抜いたものと説かれる井手至氏(9)の指摘に従うべきであろう。

さて、(6)の歌群をこのように解するとき、次に(7)の歌群以降の、題詞に地名が明記されない現象が問題となる

が、これはその歌群より前に位置する、作歌の場所を具体的に明記した題詞を有する歌群と同一の作歌の場所であるため省略したと解される。その想定認められ得る可能性を示す例が見出される。

それは次に挙げる題詞に地名を明記しない(18)・(19)の歌群のあり方である。

(17)筑紫の館に至りて本郷を遙かに望み懐愴きて作る歌
四首

志賀の海人の 一日もおちず 焼く塩の 辛き恋をも 我はするかも (三六五二)

志賀の浦に いざりする海人 家人の待ち恋ふらむに 明かし釣る魚 (三六五三)

可之布江に 鶴鳴き渡る 志賀の浦に 沖つ白波立ちし来らしも 一に云ふ「満ちし来ぬらし」 (三六五四)

今よりは 秋付きぬらし あしひきの山松陰に ひぐらし鳴きぬ (三六五五)

(18)七夕に天漢を仰ぎ観て各思ふ所を陳べて作る歌三首
秋萩に にはへる我が裳 濡れぬとも 君がみ舟の綱し取りてば

右の一首大使 (三六五六)

年において 一夜妹に逢ふ 彦星も 我にまさり

て 思ふらめやも (三六五七)

夕月夜 影立ち寄り合ひ 天の川 漕ぐ舟人を
見るがともしき (三六五八)

(19) 海辺に月を望みて作る歌九首

秋風は 日に異に吹きぬ 我妹子は 何時とか我
を 齋ひ待つらむ (三六五九)

大使の第二男

神さぶる 荒津の崎に 寄する波 間なくや妹に
恋ひ渡りなむ (三六六〇)

右の一首土師稻足

風のむた 寄せ来る波に いざりする 海人娘子
らが 裳の裾濡れぬ 一に云ふ「海人の娘子が
裳の裾濡れぬ」 (三六六一)

天の原 振り放け見れば 夜そふけにける よし
ゑやし 一人寝る夜は 明けば明けぬとも (三六六二)

右の一首旋頭歌なり。

わたつみの 沖つなはのり くる時と 妹が待つ
らむ 月は経につつ (三六六三)

志賀の浦に いざりする海人 明け来れば 浦回
漕ぐらし 梶の音聞こゆ (三六六四)

妹を思ひ 眠の寝らえぬに 暁の 朝霧隠り 雁

がねぞ鳴く (三六六五)

夕されば 秋風寒し 我妹子が 解き洗ひ衣 行
きてはや着む (三六六六)

我が旅は 久しくあらし この我が着る 妹が衣
の 垢付く見れば (三六六七)

右の(18)・(19)の歌群の題詞は作歌ないしは誦詠の契機を示すのみである。しかし、その歌群の歌内容を詳細に眺めると、それらの歌が(17)の題詞の示す範囲で、同一の場において作歌誦詠されたと思われるいくつかの要素が見出される。つまり「志賀の浦」、「海人」、「秋」の語の共有だけでなく、歌内容において三六五三と三六六四、三六五五と三六五九、三六五六と三六六一などに類似が認められることもそのあらわれと解される。

そしてさらに、その想定を裏付けるものとして、(7)の歌群以降の題詞における国名の記載法にも、作歌の場所が同一の国内である場合には国名を省略していることが認められる。(前章二の作歌事情記載形式を参照)

以上、題詞を手掛りに検討した結果、「麻里布の浦歌群」の前には、(10)の「長門の浦より船出する夜に月の光を仰ぎ観て」という作歌環境で作歌誦詠された、いわゆる「長門の浦船出歌群」(10)・(11)・(12)が存在すると推察

される。

四

さて、(10)・(11)・(12)の歌群の歌が、同一の場で作歌詠詠されたと推察されるとき、次にそれらの歌がどのような関わりを有しているのか、また、そこに看取される関係をもどのように解すべきかが問題となる。以下、それらの歌群の歌の相互関係を分析検討し、それを意義付けてみたい。

まず、次に記した(10)・(11)の歌群の歌を検討してみたい。

(10)月読みの 光を清み 夕なぎに 水手の声呼び

浦回漕ぐかも (三六二二)

山のはに 月傾けば いざりする 海人の燈火

沖になづさふ (三六二三)

我のみや 夜舟は漕ぐと 思へれば 沖辺の方に

梶の音すなり (三六二四)

(11)夕されば 葦辺に騒き 明け来れば 沖になづさ

ふ 鴨すらも 妻とたぐひて 我が尾には 霜な

降りそと 白たへの 翼さし交へて 打ち払ひ

さ寝とふものを 行く水の 反らぬごとく 吹く

風の 見えぬがごとく 跡もなき 世の人にして

別れにし 妹が着せてし なれ衣 袖片敷きて

一人かも寝む (三六二五)

反歌一首

たづがなき 葦辺をさして 飛び渡る あなたづ

たづし 一人さ寝れば (三六二六)

右、丹比大夫、亡き妻を懐愴く歌

右の(11)の歌群は、編纂者により(10)の歌群と歌詞の上での類想、類句(「沖になづさふ」の共有、「夕なぎに」と「夕されば」を頼りに付加・挿入された)と説かれている。

しかし、歌内容をもてみると、(11)の歌群の歌は(10)の歌群の歌から連想されたと思われる要素が見出される。それは、両歌群の間に次のように顕著な対応、対比のあることから考えられよう。

まず、(10)と(11)の歌群には、(10)「我と海人」、(11)「鴨・鶴と我」というように、自己の身の上と対比させて詠むという発想の類似がみられ、その(10)「海人」と(11)「鴨・鶴」の組み合わせも海辺の素材として唐突ではない。それは、たとえばこれらの歌に傍線を付して示したように、(10)の歌群で(A)「夜船を漕ぎ行く我」と(B)「沖辺で漁りする海人」とが対比して表現されている。そしてその(B)は、次に記す使人のある一人が筑紫の館で詠んだ歌志賀の浦に いざりする海人 家人の待ち恋ふらむに 明かし釣る魚 (三六五三)

と同様に、自己の境遇から「海人」に共感を覚えて詠んだと解されることから、(B)は(A)と共に、現在家人(妹)と離別しているというイメージに結びつく。

一方、(11)の歌群にも、やはりこれらの歌に傍線を付して示したような対比する内容が詠まれている。それは長歌部で、(C)「雌雄が寄り添って寝る鴨」と(D)「一人寝る我」が対比され、また反歌部では「鶴が鳴く」の表現が、頼りないという意味の形容詞「たづがなし」を掛けていると解されるとすれば、(E)「頼りなく葦辺をさして飛び渡る鶴」と(F)「たづたづしく一人寝る我」とが対比して表現されている。

また、(11)の歌群の歌は、「渡り鳥」である「鴨」が「はかない鳥であるにもかかわらず雌雄常に連れ立っている」と詠まれた感興に基本的な作歌の与件があり、(10)「長門の浦を発し月光の中を進む船に乗る使人」にとつて、深く心に響くものであったと考えられる。

そしてまた、(11)の歌群の「別れにし 妹が着せてしなれ衣 袖片敷きて 一人かも寝む」の表現が、冒頭贈答歌の

別れなば うら悲しけむ 我が衣 下にを着ませ
直に逢ふまでに (三五八四)
という女の立場の歌に響き合い、そこに表出された「妹

との離別の情」が作歌誦詠される時、その場の人々の心をゆらぎ渡ってゆくことも、かかる歌の誦詠条件と思われる。

要するに、両歌群の歌は単なる語句の類似ということではなく、より深い所で関わり合っており、(11)の歌群の歌は、その時点で「古き挽歌」としての機能を消失し、^(11B)「妹との離別の状態」を表現した(10)の歌群の構築世界を展開させる機能を有していると推察される。

さて、(10)と(11)の歌群をどのように理解するとき、次にそれらの歌群と(12)の歌群とがどのような関わりを有しているかが問題となる。そしてまた、(12)の歌群の歌には、すでに諸先学により指摘されているように、次に記す(12')の歌の影響関係の問題がある。以下、その問題から考えてみたい。

(12) 1 朝されば 妹が手にまく 鏡なす 三津の浜
辺に 大舟に ま梶し貫き 韓国に 渡り行か
むと b 直向かふ 敏馬をさして 潮待ちて 水
脈引き行けば 沖辺には 白波高み 浦回より
漕ぎて渡れば 我妹子に 淡路の島は 夕されば
雲居隠りぬ 2 「さ夜ふけて 行くへを知らに
我が心 明石の浦に 舟泊めて 浮き寝をしつつ
わたつみの 沖辺を見れば いざりする 海人の

娘子は 小舟乗り つららに浮けり」³「曉の
 潮満ち来れば 葦辺には 鶴鳴き渡る。朝なき
 に 舟出をせむと 舟人も 水手も声呼び^d
 ほ鳥の なづさひ行けば 家島は 雲居に見えぬ
 我が思へる 心和ぐやと 早く来て 見むと思
 ひて 大舟を 漕ぎ我が行けば 沖つ波 高く立
 ち来ぬ」⁴よそのみに 見つつ過ぎ行き 玉の
 浦に 舟を留めて 浜辺より 浦磯を見つつ^f泣
 く子なす 音のみし泣かゆ 海神の 手巻の玉を
 家づとに 妹に遣らむと 拾ひ取り 袖には入
 れて 返し遣る 使ひなければ 持てれども 験
 をなみと また置きつるかも」^(三六二七)

(12')¹「臣の女の くしげに乗れる^a鏡なす 三津の
 浜辺に さにつらふ 紐解き放けず 我妹子に
 恋ひつつ居れば 明け晩の 朝霧隠り^f鳴く鶴
 の 音のみし泣かゆ」²「我が恋ふる 千重の一
 重も 慰もる 心もありやと 家のあたり 我が
 立ち見れば 青旗の 葛城山に たなびける 白
 雲隠る」³「天さがる 鄙の国辺に^b直向かふ
 淡路を過ぎ 粟島を そがひに見つつ^c朝なき
 に 水手の声呼び 夕なきに 梶の音しつ 波
 の上を 行きさぐくみ 岩の間を 行ききもと

ほり 稲日つま 浦廻を過ぎて^d鳥じものな
 づさひ行けば 家の島 荒磯の上に うちなびき
 しじに生ひたる なのりそが なども妹に 告
 らず来にけむ」

(4・五〇九)

この両歌を比較すると、旅において妹を思うという点
 はもちろんのこと(12)の歌の傍線 a、f と(12')の歌の a、f
 との間の句法にも類似が認められる。そしてその関係に
 ついては先に述べたように、「模倣」とみたり「意識的
 に学んだ」ものと解されたりしているが、その類似する
 (12)の歌についての作歌契機や作歌意識に関しては未だ明
 らかではない。

しかしまた、両歌には相違する点も少なくない。たと
 えば、まず全体的には、(12')の歌は三段に分けられるのに
 対し、(12)の歌は四段であるという違いを示し、(12')の歌に
 おいて難波の時点での次元で詠まれた内容が、(12)の歌で
 は欠如し、難波出發後の内容のみが詠まれているという
 相違を示している。そして、歌内容についても、地名の
 羅列的な表現に相違がみられ、さらにはその連続的展開
 が、(12')の歌は「を過ぎ」という道行的展開であるのに
 対し、(12)の歌では「朝・夕」、「夜」、「暁・朝」という時
 間的な継起を基調にして展開している。また、(12)の歌

は、地名から触発される思いを接続詞「ば」を頻用して説明的に詠い継いでおり、題詞の示すように、「物」十「ば」十「思」のパターンを呈している。

このように、(12)の歌には(12')の歌と相違する点も認められ、このことはその相違点を引き起こす別な要因、つまり作歌契機となる別な歌の存在を暗示するものと推察される。

そこで、(10)・(11)・(12)の歌群の歌を比較してみると、(12)の歌群は、(12')の歌のみでなく(10)・(11)の歌をもその発想の契機として作歌されたと思われる要素が見出される。それはまず、次に記すような語句の類似として現われている。

(7)(10)「夕なぎに 水手の声呼び」―(12)「朝なぎに 舟出をせむと 舟人も 水手も声呼び」―(12')「朝なぎに 水手の声呼び」

(1)(10)「いざりする 海人の燈火 沖になづさふ」―(12)「沖辺を見れば いざりする 海人の娘子は 小舟 乗り つららに浮けり」

(7)(11)「たづがなき 葦辺をさして 飛び渡る」―(12)「暁の潮満ち来れば 葦辺には 鶴鳴き渡る」―(12')「明け 晩れの 朝霧隠り 鳴く鶴の」

(4)(10)「夕なぎに」―(11)「夕されば」、
「明け来れば」―(12)「朝されば」、
「夕されば」、
「さ夜ふけて」、
「暁の」、

「朝なぎに」

また、(10)・(11)の歌群の歌の影響関係は、歌内容にもみられ、(12')の歌との相違点として挙げた中にも顕著である。たとえば、まず(12)の歌に「三津」から「玉の浦」までの地名、いわゆる「過去の地名」(長門の浦に比べて)を詠み込むという発想には、(11)の「別れにし 妹が着せてしなれ衣」という表現が関わっているであろう。本来、その表現には「挽歌」としての「別れが久しい」という時間的距離が内在されているが、(11)の歌群の歌が(10)の歌群に引き続き場などで誦詠されたときは、おそらくは「挽歌」としての機能はもはや消失され、「妹との離別の情」としての意味をもってむかえられ、その「別れの久しさ」は使人等自身のものでして享受されたにちがいないと思われる。つまり、(12)の歌群の歌においては、妹と離別してからの過ぎ去った時間的・空間的な距離というのが意識され、「過去の地名」として表現されたと解される。

また、接続詞「ば」を頻用して説明的に表現される、地名から触発される思いは、その地名が「妹が手にまく鏡なす 三津の浜辺」、「敏馬」^(注14)、「我妹子に 淡路の島」、「我が心 明石の浦」、「家島」、「玉の浦……海神の手巻の玉を 家づとに 妹に遣らむと」などと表現され「妹」

を想起させる要素を有し、さらにその地名の地に「沖辺には 白波高み」、「夕されば 雲居隠りぬ」、「沖つ波高く立ち来ぬ」などの理由から逢えないことが表現され、「妹との離別」を暗示させている。これも、(10)「離別の状態」(11)「離別の情」と構築された世界と関わっているとと思われる。

さらにまた、それらの地名がいれば時間的継起に従って表現されていることは、(11)の「夕されば 葦辺にさわぎ 明け来れば 沖になづさふ 鴨すらも」の表現が関わっていると思われるが、その発想の根底には、「長門の浦を發し月光の中を進む」という作歌環境の下で「にほどりの なづさひ行けば」などと表現される使人等の不安の様相を具体的な「一日」という時間の中での行動として示そうとする意識が働いていたのではなからうか。

そして、「長門の浦を發し月光の中を進む」という作歌環境の下において、(10)「離別の状態」(11)「離別の情」と展開する世界の中で(12)「難波出發後の離別の状態・情」を表現することは、月光の中を進む船に乗る使人等にとって、今までの旅の思いとともにこれから先の状況をも暗示させるものとして機能していると推察される。

(12)の歌群の第二反歌

秋さらば 我が舟泊てむ 忘れ具 寄せ来て置け

れ 沖つ白波

(三六二九)

の帰路における「忘れ具 寄せ来て置けれ」の表現は、まさしくこれから先の辛かろう状況を予想して、妹に逢えないなげきかなしみを忘れようとする切なる心情とかわつての「忘れ具」であろう。

以上述べたように、(12)の歌群の歌は、(10)・(11)の歌群の歌と単に語句的な類似ばかりではなく歌内容や発想上にも類似が認められ、それらのことから(12')の歌のみでなく(10)・(11)の歌群の歌の影響をも受けて作歌された集団的共感を基底として成立した歌と理解される。

五

さて、題詞や歌内容の検討から(10)・(11)・(12)の歌群の歌は同一の作歌詠の「場」を有すると考えるとき、ここに至って、(12)と(12')の歌群の歌の影響関係をどのように解すかが問題となる。つまり、(12)と(12')の歌の類似は何故に生じるのか疑問が残る。

そこで、その原因を検討した結果、(12)の歌と(12')の歌の類似は、(11)の歌群の歌を契機として(12')の歌が想起されたことが関わっていると思われる要素が見出される。

それはまず、次に略記するような歌内容の類似点から、指摘することができよう。

(11) (a) …… 別れにし 妹が着せてし なれ衣、袖片、敷き、
て、一人かも寝む (三六二五)

(b) たづが鳴き 葦辺をさして 飛び渡る あなたづ
たづし 一人さ寝れば (三六二六)

(12') (a) …… さにつらふ 紐解き放けず、我妹子に 恋ひ
つつ居れば …… (四・五〇九)

(b') …… 明け晚れの 朝霧隠り 鳴く鶴の 音のみし
泣かゆ …… (四・五〇九)

また、(11)と(12')の歌群には、次に記すような作者名の類
似も認められる。

(11) 右、丹比大夫、亡き妻を懐愴く歌

(12') 丹比真人笠麻呂、筑紫国に下る時に、作る歌一首

右の(11)「丹比大夫」について、丹比真人県守とする説

が提示されているが、作者の究明には「右、丹比大夫」

の記載がいつ頃付されたかが関わり、仮りに天平八年頃

としても「大夫」が四位、五位の人の尊称であることか

ら、他に「広成」「広足」「屋主」等も考えられ定説を

みない。^(金16)また、(12')の作者「笠麻呂」については伝未詳で

あり、両者の関係は明らかでない。

しかし、ここに両者の関係を推察し得る注目すべき説
が提示されている。それは前章三の(6)「所に当たりて誦
詠する古歌」群の性格のところで既述した、使人等一行

が長田王の編纂した古歌巻を携行していた、とされる井
手至氏の説である。^(注17)

長田王は、続日本紀に天平四年十月摂津大夫になった
ことが記されており、古くからの九州・大陸方面の海上
交通の中心地である難波の港を管理する摂津職の長官で

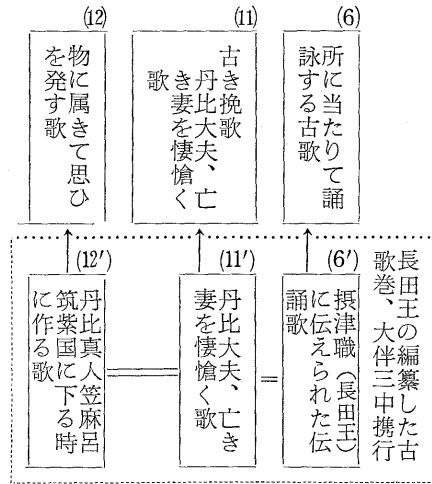
あった。^(注18)そして、(12')の歌は作歌年代など詳らかではない
が、題詞に「筑紫の国へ下る時に…」とあり、難波の
港とは無関係とは思われない。

また、(11)の歌群は題詞に「古き挽歌」とあり、(6)「所
に当たりて誦詠する古歌」と同様に長田王が編んだとさ
れる「古歌巻」に収められていたと考えられる可能性を
充分に有している。つまり、両者は次の頁に略記するよ
うな、旅に携行したと思われる手控的な「古歌巻」の存
在次元で関わっていたのではないかと推察される。

(11)の「古き挽歌」や(12')の長歌を使人等一行の誰かが記
憶していたという考えもぬぐいざりがたいが、おそら
く、これらの歌は携行した「古歌巻」を参考にして作歌
誦詠されたのではなからうか。

また、(6)「古歌」、(11)「古き挽歌」とあることは、そ
の歌がほとんど古歌巻に記載されたままの形であり、(12)
に何も記されないことは、(12)の歌が(12')の歌そのままでな
く(10)・(11)の歌から影響を受け改作されたことの証左と思

われる。



今、ここまでの歌の連想過程について想像を逞しくしてみようと、まず、(10)の歌群の歌から(11)の歌が想起され(11)の歌として誦詠され、さらにその(11)の歌から(12')の歌が想起され、それに(10)・(11)の歌群の歌や「場の力」が加わり(12)の歌群の歌が作歌誦詠されたと推測することができる。

六

以上、(10)・(11)・(12)の歌群について、題詞や歌内容から相互関係をみてきた結果、この三歌群は作歌事情の記載

形式に同一の作歌誦詠の「場」にあった痕跡を残して記載され、さらにそれらの歌に連想的関連が看取されることから、同一の「場」で作歌誦詠されたと解したい。そしてその場は、離別の情をテーマとし、「古歌」や「古挽歌」を転用して誦詠するというような私的性格を有した場であろう。

また、(12)と(12')の歌群について、「記載の次元」における類似として影響関係が指摘されているが、(12')の歌がひとつの「場」において(11)の歌から連想され、さらに(10)・(11)の歌群の歌の影響を受けて(12)の歌として誦詠されたと考えられることから、「口誦の次元」にかえして捉えるべき関係であろうと思われる。

さらに、本稿で述べたような小歌群がその前後もしくは全「遺新羅使歌群」の形成にどのように関わっているのかが問題として残るが、そこには本稿で見たような時間的・空間的に共通する「場」と共に、時間的・空間的な隔りを有する精神的な連帯感とでもいうべきものが関わっていると思われる。つまり長きにわたっての同一の環境下にある使人等の「共有する生活空間」における発想が基盤となり、各小歌群の歌の呼応を生み、おのずと「歌物語」の様相を呈しているのではなからうか。(12)の歌群の第二反歌

秋さらば 我が舟泊てむ 忘れ貝

寄せ来て置けれ 沖つ白波 (三二六二九)

の歌が、冒頭贈答歌の歌

秋さらば 相見むものを なにしかも 霧に立つ

べく 嘆きしまさむ (三五八一)

我が故に 思ひな痩せそ 秋風の 吹かむその月

逢はむものゆゑ (三五八六)

と呼応しつつ、「遣新羅使歌群」のテーマの一つとして
貫かれていることも、その証であろう。

それらの点については、今後さらに他の小歌群にも検
討を加えた上で考えてみたいと思う。

注1 『萬葉集評釈』第十卷

2 『万葉集の文学論的研究』

3 拙稿「遣新羅使人等の歌の座―冒頭贈答歌十一首の
場合―」(『万葉の発想』所収)

4 拙稿「遣新羅使人等の歌の座―麻里布の浦・竹敷の
浦歌群の場合―」(『萬葉研究』第一号)

5 『萬葉集私注』八

6 藤原芳男氏「遣新羅使人等の無記名歌について」
(『萬葉』第二十二号)

7 『萬葉集私注』伊藤博氏は「萬葉集の歌物語―卷十
五の論―」(『万葉集の構造と成立』下 所収)にお

いて「悲恋」として、また久米常民氏は『万葉集の
誦詠歌』において「恋歌」として転用されたとい
ておられる。

8 「遣新羅使人と古歌」(『万葉集を学ぶ』第七集所収)

9 「遣新羅使歌群の構成」(『万葉集を学ぶ』第七集
所収)

10 井手 至氏「柿本人麻呂の羈旅歌八首をめぐって」

(『萬葉集研究』第一集 所収)

11 注8に同じ

12 『小学館本萬葉集』(4)

13 このような例として、新年祝賀の宴席上で死に関す

る挽歌(19・四二六―三七)が転用され誦詠され

たことが、久米常民氏の注7前掲書や、伊藤博氏の

「歌の転用」(『萬葉集の表現と方法下所収)に指摘

されている。

14 ここは「美奴面」とある。他に「三大女」(946・1055)

「見宿女」(1066)、「敏馬」(205・389・449・3006)などが

ある。おそらくこれも「妹」のイメージに結びつく

ものと考えられる。

15 土居光知氏「遣新羅使人の歌」(『古代伝説と文学』

土居光知著作集第二所収)

16 「廣成」―神龜元年二月從四下、天平三年正月從四上

と昇叙し、同年八月遣唐大使となり翌五年難波より

出航、七年四月正四上に叙せらる。「廣足」―神龜三

年正月正五下、天平十二年正月正五上に叙せらる
「屋主」―亀元年二月正六上より従五下に叙せられ、
天平十七年正月従五上に昇叙、天平十七年正月従五
上に叙せられる。「國人」―天平八年正月、正六上よ
り従五下に叙せられる。「伯」―天平七年四月正六上
より従五下に叙せられる。(以上、続日本紀による)
注10と同じ。

17
天平四年十月、撰津大夫となり、同六年二月朱雀門
前の歌垣にその頭となり、同九年六月卒した。正四
下であった。

19
伊藤博氏は注7前掲書で、遣新羅使歌群について
「実録に基づきながらも虚構的な歌物語として組み
立てられた」と説かれている。

付記
小稿は、昭和五十四年五月の上代文学会仙台大会で報
告させていただいた前半部に、その折、渡瀬昌忠氏、
後藤利雄氏をはじめ多くの方々よりたまわった御教示
を得、加筆したものである。

なお後半部は「萬葉集論攷一」(昭和五十四年度中
刊行予定)に寄稿した。併せご批評を得ば幸甚であ
る。